

# Fons



## 幸久小学校のキャンドルナイト

萩谷 浩司

「きれいだねー」並べられたペトルボトルキャンドルに次々と火がともされていくと、そんな声があちこちから聞こえてきました。昨年夏、二年ぶりに行われた幸久小学校のキャンドルナイト。閉校を迎えるということで、校章と「ありがとう 幸久小」の文字がグラウンドに作り出されました。二〇〇八年から続くキャンドルナイトはどのようにスタートしたのか。立ち上げメンバーの一人である小瀧孝男さんにお話を伺いました。

「その頃から幸久小の児童は減少傾向にありました。そこで子どもたちの思い出に残るイベントをして、大人になっても帰ってきたくなる地域にしていきたい」と当時PTAで話が上がりました。「イメージしていたのは自分たちが子ども頃に小学校の校庭で行われていた盆踊り大会だったそうです。色々なアイデアが出され、その中の一つがキャンドルナイトでした。」

その後、PTAを卒業したOB達によりチーム幸久が結成され、今も学校でのイベントや行事にボランティアとして関わってくれています。「小学校がなくなってしまうのは本当に寂しいですが、子どもたちには自分達の生まれ育った地域に自信をもって欲しいですね」と小瀧さんはおっしゃっていました。学校がなくなっても地域を見守る人たちの繋がりはこれからも続いていきます。

こちらのQRコードをスマートフォン等でスキャンすると、幸久小学校のキャンドルナイトを観ることが出来ます。





「取材」 萩谷 浩司

## 天神ばやし太鼓

天神ばやし保存会の方によれば、天神ばやし太鼓を学ぶ取組は、地域の伝統を学ぶ学習の一環として、約二十年前に始められました。

天神ばやし太鼓は佐竹氏の時代に、いくさの前の出陣囃子(しゅつじんばやし)が始まりだと言われています。その後は農民の娯楽として伝えられてきたそうです。

体育館での練習を見学に行ったのは十二月半ば。陽も傾いて寒くなってきた時間帯でしたが、児童の皆さんの演奏が始まると、その熱気と懐かしいリズムに、見ている自分も自然と体が動き、暖かくなってくる気がしました。峰山小学校になってからは、五年生が天神ばやし太鼓を学び続けることになっています。このリズムはこれからもこの地で伝え続けられています。



## 佐竹小学校に残る名物校長の温もり

「寄稿」 山田 健雄さん

佐竹小学校の瀬尾校長先生が、「すごいものがある」と言って見せてくれたのは、校長室の机でした。その机にまつわる物語を、佐竹小学校の歴史を調べている山田健雄さんからうかがうことができました。



昭和五年から九十年の間使われてきた校長先生の机は、佐竹尋常高等小学校の名物校長として、戦前の教育界をけん引してきた寺門清三郎先生の薫陶(くんたう)を受けた六名の先生方が在職記念品として贈呈したものの。机の腰板にそれぞれのお名前が刻まれていることに加え、偉大な教育者にあやかろうと、今日まで使い続けられてきたものと考えられます。

この名物校長先生にとつて、最も悲しい出来事がありました。それは、太平洋戦争の物資不足で、教え子から贈呈された校長先生の胸像までもが、昭和一八年七月に供出させられることになったのです。そのため、寺門校長先生の身内十人と卒業生や教師十一人でお別れの記念写真を残しています。多くの教え子が寄贈してくれた胸像が、戦争の兵器や弾薬などに加工され人の命を奪うことに虚しさを感じたに相違ありません。

佐竹小学校は、令和四年四月一日から施設分離型の小中一貫教育校、「峰山小学校」として再スタートしますが、これまで培ってきた先生と児童との心の交流を基礎に、過去の有形無形の歴史も引き継がれていきます。



山田健雄さんが自費出版で作成した「佐竹小学校沿革史発掘」をいただきました。抽選でフォonz読者50名様にプレゼントいたします。応募は生涯学習センターまで受け取りにこられる方に限らせて頂きます。ハガキに、お名前・郵便番号・ご住所・フォonzの感想をお書きの上ご応募ください。締め切りは6月10日(金)必着となります。なお、当選者の発表は冊子引き換えハガキの発送をもって代えさせていただきます。

(宛先) 〒313-0061 常陸太田市中城町3280

常陸太田市生涯学習センター内

フォonzネットワーク事務局「佐竹小学校沿革史発掘プレゼント」係

\*ご応募いただいた個人情報、当選者への通知等の目的達成に必要な範囲内で利用し、その他の目的での個人情報の利用は一切行いません。



## ぐんど児童クラブ

二〇一五年から約二年半にわたる「ぐんど児童クラブ」の子どもたちとの関わりは、今の私の人生に影響を与えている。現在、私は静岡県浜松市にあるNPO法人クリエイティブサポートレッツというアートNPOが運営する障害者福祉施設で働いている。日々、重度の知的障害のある人たちのやることなすことに、驚きと戸惑いを感じつつも楽しく仕事をしている(いや、遊んでいる)。

郡戸の子どもたちとは、夏休みなどの長期休みを利用して沢山のワークショップを行ってきた。また、児童クラブの隣の教室をアトリエとして週二回程開放し、何ヶ月もかけて一つのテーマに取り組むこともあった。一く六年生までが、「これやりたい!」「これ好き!」と出来ることや得意なことを差し出し合いながら、遊びを創っていく



常陸太田アーティスト・イン・レジデンス

(二〇一五〜一七)

「寄稿」 渡部 智穂さん



姿を見守るのはとても面白かった。子どもたちの明るいユーモアから生まれる表現に驚き、笑いながら一緒に過ごした日々が、今の私に繋がっている。

任期終了後も、時折、児童クラブを訪ねていたが、新型コロナウイルスの影響で、その機会を失ってしまった。そんな中、一昨年末に志望する高校に受かったと男の子から電話をもらった時は、とても嬉しかった。そして昨年末には、二人の男の子と久しぶりに会うことが叶った。中学生となり、成長した姿にびっくりしたが、その話し方や表情からは、どこか当時の面影を感じ、とても懐かしかった。二人の話を聞きながら、これからもっと沢山の悩みや選択を繰り返して成長していくのだから、ほんやりと想像を膨らませ、羨ましくなった。まだ始まったばかりのみんなの人生の中で、あの時の体験が、何か生きるヒントとして役に立つことがあるれば嬉しいなと願っています。





# 西小沢小学校

「取材」塩原慶子

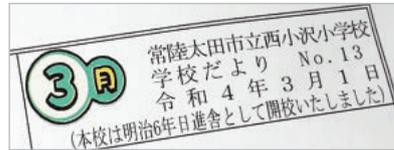
今年度で閉校になる学校では、子供たちの思い出づくりと未来への願いを込めて各校で様々な閉校行事が行われてきました。お伺いした西小沢小学校では、児童の手形で虹を作ったり、閉校式を彩る花の植栽などが行われていました。その中で目を引いたのは先生方が着ているおそろいのシャツ。背中に小学校の歴史が書いてあるのが目にとまりました。西小沢小学校は百年以上の歴史がある…？決して



古くない立派な校舎を見ながら「ほんとは？」と不思議に思い、シャツを制作なさった藤田先生にお話をうかがいました。

「この西小沢小学校に赴任してきて見た学校だよりに書いてあったんですよ。」  
学校はその

歴史を沿革史としてきちんと保管してあるとのこと、調べたご苦労を伺おうと思っていたのにあてがはずれました。ところが、「一番古いもので大正2年の写真があるんです」と校長先生のお言葉。しかもそれが隣の公民館に展示してあるとのこと。



写真展を企画したのは西小沢小閉校記念実行委員会。地域の人に呼び掛けてご自宅にある学校関連の写真も集めて一緒に展示していただきました。学校は、地域にとって学びだけでなくつながりや文化の中心として存在してました。この写真展は、この地域がコミュニティとしての力を今も持ち続けている証です。

三月二十五日夜には、幸久小学校・西小沢小学校それぞれで花火

の打ち上げが開催され、西小沢小学校のグラウンドには、願いを書いたランタンを手にした子供たちを含め、多くの地域の方たちが集まっていました。遠く幸久小学校で花火が打ち上げられる様子からでも見え、そして幸久小学校のグラウンドでも、西小沢小学校の花火を見ることができたことでしょう。ランタン越しに広がる鮮やかな花火はこれからの象徴しているようでした。





〔取材〕 鴨志田 弘子

## 子ども達がだいすきな

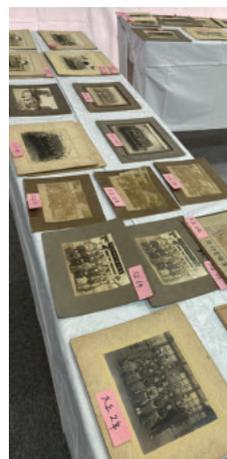
## 思い出の場所 ヤマモモの木

木登りは、昔から人気の遊びでしたが、こんなに子ども達に愛された木は珍しいかもしれません。金砂郷小学校では「ヤマモモの木」が子ども達に人気。写真のように大勢の児童たちに親しまれ、登っては遊んだ景色は子ども達にとって忘れられない思い出になるでしょう。

〔寄稿〕 三年 會澤 清伶  
河井 莉乃

金砂郷小学校では三年生になるとヤマモモの木に登ることができます。

わたしは二年生の時から楽しみにしていました。はじめて登ったときはうれしかったし、楽しかったです。木の上から見る風けいはきれいだったけど少しこわかったです。



## 田楽舞を伝えたい

〔取材〕 鴨志田 弘子

二〇〇三年に行われた西金砂神社の磯出大祭礼で田楽舞をご覧になった方も多いでしょう。金砂郷小学校では伝統の舞を子どもたちが地域の方から学んでいます。「四方固め」「種まき」「一本高足」「獅子舞」それぞれの舞い方やその意味を田楽師の方から指導を受け、楽師の方々の笛や太鼓の音に合わせて、心をこめて表現しようとする児童たち。そのひたむきな姿が心に残っています。

大祭礼のご縁から始まった日立市立水木小学校との交流は今でも続けられています。今回はオンラインでの開催となり、両校の様子を伝えあい、この時期だからこそさらにながりを深め新たな歩みを始めました。地域の想いや願いを大切に、常陸太田の伝統文化を守り継いでいくこのよ



うな取り組みは、統合後、金砂郷全地区の児童が集う小学校となつてからも続けて行つて欲しいと思ひました。



## 地区コミュニティとの

## 連携活動

〔取材〕 鴨志田 弘子

久米の郷住みよい地域をつくる会と久米小学校が合同で作成している「久米の郷だより」は、地域のコミュニティ誌として、令和三年度までに二十号が発行されました。「通学路見守りウォーキング」や、「久米の郷まつり」など、地域と学校との関わりをわかりやすく知っていただくため、写真を多く取り入れた見える情報誌を目指しています。

学校がもっと身近になるように、そして恵まれた自然と地域の人々に囲まれた温かい環境の中で、子どもたちがのびのびと育めるようにと、地域と学校が一体となって頑張っています。今後は、金砂郷小学校として地区全体の拠点となり、地域と共にその想いを受け継いだ学校が期待されます。



令和三年度で統合になる学校の取り組みをそれぞれご紹介してきました。すべての学校で、児童・先生・PTA、そして世代を超えて地域の皆さんが力を合わせて、新しい学校への門出に向けて、思い出に残る行事を積み重ねてきました。誰にとつても、もっとも思い出の残る小学校が閉校になることは、どうしても寂しい思いが募ることでしょう。しかしながら、みんなの思いが込められた時は、途切れることなく未来へとつながっていくのを同時に感じました。心の奥底から良い思い出だなぁ、と思える一年を作り上げてきた全学校の皆さんに拍手をお送りしたいと思います。



久米の郷のメンバーを招き交流会を行いました。どんぐりや松ぼっくりを使ったお店屋さん。曲に合わせてマラカスの楽器を鳴らす楽器屋さん。カラフルなお魚がとてもかわいい魚つり屋さん。どんぐりごま・やじろべえ屋さんでは誰が一番長くこまを回しているか競争して盛り上がりっていました。



## 『TERRACE CAFE LAKI LAKI』

〔取材〕 塩原慶子

太田一高近く、いづみやさんの並びに通りの雰囲気を更新する可愛らしいお店がオープンしました。古い街並みの中でひととき目立つかわいらしさ。こちらはクレープのお店「ラキラキ」さんです。オーナーの荻津由美さんのおばあさまのお家を改装してオープンしたそうです。「常陸太田に気軽に立ち寄れるおいしい可愛いお店があるといいな」という願いをもってオープンしました(テイクアウトも可能)。買ったばかりのクレープをお店の前においてあるブランコに乗りながら食べる学生さんを見かけることもあり、その風景が新しい風を感じます。

季節ごとの限定メニューも多く、お客様がリピートしたくなるメニューを大事にしています。荻津さんは「私たちおたスマイルメイツ(イベント等で常陸太田の観光や魅力を発信)」としても活動中。元気で可愛いオーナーが手作りするおしゃれなクレープをどうぞ!



住所/常陸太田市馬場町513  
電話/080-7047-7700  
(電話でご予約の上ご来店が便利です)  
営業時間/平日 11:30~、土日祝日 10:30~  
(不定休あり)



思の出の絵本

# 『ぼくモグラ キツネ馬』

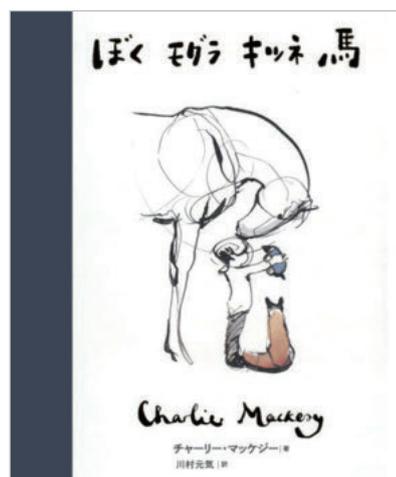
山口靖子（幡町）

題の通り、ぼくが、モグラ、キツネ、馬と出会い、彼らとの旅の中で様々な話を交わしながら、人生という美しくも恐ろしい森の中で、色々なことに気づいていく物語です。彼らの会話シーンを覗いてみましょう。でも返事まで教えるのは最初のモグラとの一つだけ。あとは、読んで感じて欲しいから。

ぼくはモグラに出会います。モグラは聞きます。「おおきくなったら、なになりにりたい？」ぼくは答えます。「やさしくなりたい」今度はぼくが尋ねます。「いちばんの時間のむだつてなんだとおもう？」モグラの答えにきつと心を揺さぶられることでしょう。

ぼくはキツネと出合います。ワナにかり牙を剥くキツネを、ぼくとモグラは助けます。付かず離れずついてきたキツネは、川に落ちたモグラを助けてくれます。そこから三ページの絵が素敵です。この作品は絵が美しい。シンプルな線だけの絵に想像力が掻き立てられ、色づく繊細な絵画に魅了されます。

それからぼくは、馬に出会います。会話はさらに深いものになっていきます。ぼくは尋ねます。「いままでであなたがいつたなかでいちばんゆうかなんなことばは？」ときどきふあんになるんだ。



ぼくがふつうだつてことをみんなにきづかれたらどうしようつて「馬とモグラは何と答えたのか...」この物語は、誰の心の琴線にも触れ、そしてきつと力をくれる、そんな本です。読み聞かせ前に一読を。文字が涙で見えないかも。

## ほっと ひといき 『イヌノフグリと オオイヌノフグリ』

佐々木 泰弘

イヌノフグリとオオイヌノフグリはどちらもオオバコ科クワガタソウ属の植物で、春の野原を彩ってくれるかわいい草花です。オオイヌノフグリの高さは十センチ程度になり写真のように一センチ程度のコバルトブルーの鮮やかな花をつけます。小さなジジミチヨウ類が良く吸蜜に訪れています。繁殖力も旺盛で田畑の周りや空き地、家の庭にもふつうにみることが出来ます。もともとはヨーロッパ原産の植物で明治初年の頃日本に入ってきた外来植物です。

## 常陸太田の地名話

35

茶屋場

『常陸太田市 徳田町茶屋場』

川松 博

常陸太田市徳田町と福島県矢祭町の県境に明神峠がある。ここを旧棚倉街道、現在の国道三四九号線が通っている。中世には、この峠は「南の関」といわれていたという。峠の南、国道沿いに茶屋場と呼ばれるところがある。江戸時代には、幕府巡見使が奥州から水戸藩に入る時、水戸藩士はこの峠で出迎えるのが通例であったようである。

この時、幕府の巡見使にご馳走を出して丁重に出迎えたことが、古川古松軒の『東遊雑記』天明八年（二七八）十月十四日の記述に記されている。

幕府巡見使のために湯茶、食事の接待をしたところが茶屋場であったとして、今でもその名をとどめている。



県境の明神峠付近

<参考文献>  
『新編常陸国誌』  
『茨城県地名大辞典』  
『里美村史』『里美の歴史散歩』  
『広報さとみ 157号』

イヌノフグリは日本古来の在来種です（古い時代に渡来した帰化植物の可能性あり）。花は四ミリ程度で薄いピンク色に赤紫色の筋が入っているのがオオイヌノフグリと異なります。近年、オオイヌノフグリなどの外来種に押されたり、環境変化により、分布地が激減してしまいました。県や環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されています。写真の個体は自宅の近くでかろうじて残っていたものです。皆さんの近くにも生き残っているイヌノフグリはいないでしょうか。今のうちにしっかりと記録しておきたいと考えています。

よく話題で取り上げられることです。名前にある「フグリ」とは雄の陰囊のことです。実際の形が犬の陰囊に似ていることからつけられたものです。少しかわいそうな気がしますが、「瑠璃唐草」「天人唐草」という別名がありますが、あまり一般的ではありません。



左上：イヌノフグリ  
右：オオイヌノフグリ  
左下：オオイヌノフグリの実  
いずれも2022年1月撮影  
（常陸太田市木崎一町）

# 新太田点描 27

## 齊昭公の三村施薬

水戸藩九代藩主徳川齊昭公（烈公）は、天保五年（一八三四年）三月二十七日から四月八日まで、領内の北郡（那珂郡の一部と久慈郡）地方の巡村を行い、各地の民情をつぶさに見聞している。

常陸太田市域関連では、四月六日朝に小生瀬村（大子町）を出発して高倉村に入り、安寺・持方・武弓を経て天下野村に至り、庄屋市郎兵衛宅に宿泊している。

翌七日は山田川・浅川沿いの村々を巡り大方村泊り、八日朝に出立して小嶋村にて昼食を摂ってから久慈川を舟で渡り、鴻巣村宝幢院で休憩した後、那珂川を渡船し水戸へ帰着している。

さて、今回紹介する史料は齊昭公が前述の三集落（安寺・持方・武弓）のために郡奉行に宛てた民間療法の手紙である。現物は巻物に仕立てられ巻止め題箋には『御筆』とあるところから、齊昭公の自筆と判断される。

本紙は縦十六・五cm／横百四十二・二cmで長い間、巻いたままの状態を保管されていたため、所どころに紙魚の跡がみられる。今これを紐解きながら読んでみよう。

三村施薬 アテイラ モチイカタ

タキイウ

感冒

清熱飲子

接骨木花一匁 蜀葵根同上 野菊花五分

硝石同上

中暑

香薷飲

香薷二匁 厚朴 白藜豆炒 伏苓壑匁

（以下、傷病名だけを列記しておく）

霍乱 食傷 痢疾 皮膚疥癬及一切瘡・

黄疽 癩 蝮蛇咬 狂犬咬又鼠咬等々

ここでは一般的な病氣、怪我等に対して、身近な薬草や薬石を取り上げて治療方法を記しているが、なかには現在まで伝承されているものもある。

一例だけ紹介しよう。蝮蛇に咬まれた時の対処方法である。蝮蛇血清の無かった時代は致命的であったと思われるが、処置治療を次のように記している。

蝮蛇咬

烏柿

右疵口ヲ血ノ澤山出ルホドニ冷水ニテ／擦洗

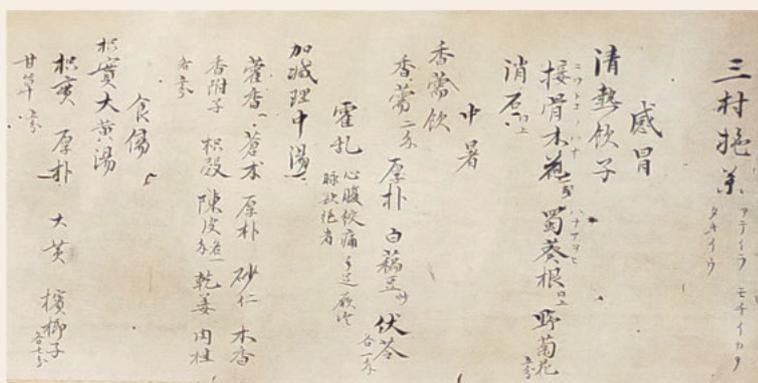
ヒ其後此薬ヲ搗キ爛カシテ／傳ルナリ

とある。

これはかつて農山村民俗調査で聞き取りを行った時に、高齢の女の人が自分の体験談として話してくれたことに合致する。それによれば、

「夏、朝草刈りの時に蝮蛇に指先を咬まれた。すぐに指の付け根、手首、二の腕をきつく縛り咬まれたところを少し鎌で切り開き、しばらくの間流水に浸しながら血を絞り、洗い流し、直ぐに柿渋液の器に指を浸しておい

た。約一カ月程は体のアチコチ、関節等がピリピリしてつらかったが徐々に痛みが取れて回復した。今でも咬まれた指は曲がらないんだ」と手指を見せてくれたことがある。もしこれが事実ならば、まさに齊昭公が書き記した処置方そのものではないだろうか。いつの時代でも人の生死に関わる病氣や怪我は、常に身近に起きるものとして大いに関心を寄せていたのであろう。（吉成英文）



（三村施薬の巻首部分 ひたちなか市 大山富彌氏所蔵）